

一 概念——（社会の構造的更新の理念）

『共産党宣言』のなかで、現代にまでおよぶ各世代に最も力強い影響を与えた章の一つは、『批判的・空想的社会主义および共産主義』と題する一章である。

よく知られているように、マルクスとエンゲルスは、「正義者同盟」から「共産主義の信条の作成」を委嘱された。（モーゼス・ヘスの草案は、エンゲルスの反対で斥けられたのであった。）これは、一八四八年に開催する計画であった万国共産主義者大会および全被抑圧者同盟を召集するための重要な準備をなすものであった。この信条ではなお、正義者同盟指導部の指示によって、「社会主义および共産主義諸党派にたいする能度」、すなわち類似の諸流派にたいする境界について原則的な表明がなされなければならなかった。その際考えられていたのは、とりわけフリーエ主義者たち、中央本部がロンドンの同盟大会に提出した信条の草案でいうところの「これら浅薄な連中」であった。エンゲルスが初めに書いた草案では、「空想的」社会主義者または共産主義者たちについてはまだ何も述べられていない。われわれはただ、「大げさな改革方式」を提唱する人びと、「社会を再組織する」という口実のもとに、いまの社会の基礎を維持し、

それによっていまの社会そのものを維持しようと欲する人びと」、またそれ故に排撃さるべき「ブルジョア社会主義者たち」として特徴づけられた人びとについて聞くだけである。この特徴づけは、最終の草案ではとくにブルードンに向けられている。エンゲルスの草案と実質上マルクスから発したこの最終草案との隔りは、きわめて大きいのである。サン・シモン、フリーエおよびオウエンの体系について述べた「諸体系」(マルクスの草案ではカベール、ワイトリングおよびバブーフさえがそうした体系の樹立者としてあげられている)は、工業およびそれとともに「プロレタリアート」がまだ発達していない時期の産物としてとりあつかわれている。したがって「プロレタリアート」問題を捉え克服することはまだ不可能であり、これに代って現れたのが、まさにかの諸体系であって、これは、虚構的、幻想的、空想的以外ではありえないし、また根本において、ようやく発展しはじめ、そこからやがて「社会の全般的変革」が生起すべきかの階級対立を廃棄することを旨とするものであるとされた。マルクスはここで、彼が少し前にブルードンにたいする反駁書(『哲学の貧困』)でいったことを再び言明しているにすぎない。「これら理論家たちは空想家である。彼らは自分の眼前に起りつつあることを説明し、自分たちをその器官としさえすればよいという状態にまだ達していないので、どうしても自分の精神の中に科学を探さざるをえないのである。」これらの体系が立脚する現存事態の批判は、貴重な啓蒙的材料として認められている。これに反してそこに含まれている積極的なものはすべて、歴史的発展の経過につれて一切の実践的価値および理論的根拠を失うべきものと宣告されている。

当時の社会主義・共産主義運動の内部においてこの宣言がもつ政治的性格については、この宣言が、従来「正義者同盟」自体のなかで優勢であったのに、マルクスの思想によって押しつけられた諸々の見解にたいして向けられたものであったことを思い浮べるとき、われわれは初めてそれを推測することができるであろう。マルクスは『共産党宣言』が出てから一、二年後にそれらの見解を「英仏流の社会主義または共産主義とドイツ哲学との混ぜ合せ」から成る「秘密教義」として性格づけ、これに、「ブルジョア社会の経済機構に関する科学的洞察を唯一の堅固な理論的基礎として」対立させたのであった。マルクスのいうところによれば、いまや重要なのは「どれかの空想的体系の実現ではなく、われわれの眼前に行われている社会の歴史の変革過程への意識的参加が問題である」ことを示すにあった。かくして『宣言』の「空想主義」にたいする論争の章は、最も正確な意味での内部的な政略行動を意味するものであり、すなわちマルクスがエンゲルスを味方にして、まず第一に、「正義者同盟」(いまは「共産主義者同盟」と改称)自体における他の、みずから共産主義を称し、あるいは他からそうよばれた諸流派にたいして行った闘争が、勝ち誇る結末を見たことを意味するものである。「空想的」という概念こそは、この闘争で発射した最も鋭い仕留めの矢であったのだ。

私はいま「エンゲルスを味方にして」といった。だがここで、エンゲルスが『宣言』起草の二年前に、フーリエの遺著の断章の翻訳に附した序文の二、三の文章に触れないでおくわけにはゆかない。そこでもまたエンゲルスは『宣言』で空想的として斥けられているのと同じ諸教説について語っている。そこでもまたフーリエ、サン・シモン、オウエンが引合に出されている。そこでもまたこれらの人びとのうちの、現存社会にたいする貴重な批判と将来社会についてのほるかに重要さの少い「図式化」とが区別されている。しかし彼は前にはこうだったのである。「フランスやイギリスの人たちがすでに十年、二十年、四十年前にさえたこと、しかも非常によく、非常にはっきりと、非常にりっぱな言葉でいったことを、ドイツ人たちはいまやと一年前から断片的に知って、それをヘーゲル化してきたか、あるいは精々のところおくればせに再び見つけ出し、しかもそれを全くの新発見として、ほるかに劣った、ほるかに抽象的な形で印刷させている。」さらにエンゲルスは文字通りこうつけ加えている。「私は私自身の著書についてもならその例外とするものではない。」闘争はかくして彼自身の過去におよんだ。だがもっと重要なのは次の判断である。「フーリエは、過去と現在とを正しく認識した後で、将来を自ら構想した。」この判断は『宣言』が空想主義についていっていることと対照されなければならない。またそれとともに、『宣言』がフーリエの死後わずか十年にして書かれたものであることも忘れてはならないであろう。

エンゲルスが『宣言』から三十年ののち、そのデューリングへの反駁書で同じ『三人の偉大な空想家』について語っていること、またそれから少し後に出た影響の多い『空想より科学への社会主義の発展』でも若干の補足を加えて述べていることは、すでに『宣言』でいっていることの仕上げにすぎない。そこでもまたすぐ目につくのは、またもや同じ三人、「社会主義の建設者たち」、「資本主義的生産がかくもわずかしか発達しなかった時代には、それ以外ではありえなかったが故に」、「空想家」であったかの三人、「新しい社会の要素が古い社会のうちにまだ一般には現われ出していなかったが故に、それらの要素を彼らの頭の中で作りあげる」ことをよぎなくされたかの三人がとりあつかわれていることである。

『宣言』から『反デューリング』までの三十年の間に、エンゲルスの意見では「空想家」という称呼と注目とに値し、しかもその時代には経済的条件がすでに発達しており、また「社会的課題」ももはや「かくされ」てはいない以上、かの酌量すべき事情など認められないところのいかなる社会主義者も現われなかったであろうか。ただ一人だけ、もちろん最も偉大な一人をあげるなら、それはプルードンであり、その初期の著作の一つである『経済的矛盾の体系または貧困の哲学』（一八四六年）を、マルクスが『宣言』に先立つ有名な反駁書で攻撃したかのプルードンから、この三十年の間に、社会的情勢および課題についてのいかなる科学的理論も無視することを許されないであろうような、一連の重要な著作が現われているのである。プルー

ドンもまた（それに『共産党宣言』はマルクスが攻撃した彼の著作から「社会的ユートピア」の概念をかりたのだ）、空想家たちの一人、しかもまさに弁護しようのない人びとの一人であったのか。なるほど、ブルードンは「宣言」で「保守的またはブルジョア社会主義者」の一例としてあげられているし、またその反駁書でもマルクスは、ブルードンが、「よし思弁的だけでもマルクスは、この批判はいまも一言一句確認しなければならぬであろうと断言したし、またそれから一年後の或る手紙ではさらに、ブルードンが「甚大な禍」を及ぼしたことを、空想家たちに対する彼のまやかしの批判と反対」によって青年と労働者をろうらくしたことを語った。ところがそれからなお一年のち、『反デューリング』を書く九年前にエンゲルスは、『資本論』第一巻について匿名で発表した七篇の評論の一つで、マルクスは「フリーエもブルードンもラッサールさえも与えることができなかった科学的基礎を社会主義運動に与えようとした」と書いている。これからして、エンゲルスがともかくにもブルードンにどのような地位を与えたかは明白になる。ところで、マルクスの反駁書が出る前はどうかであらう！ 一八四四年にマルクスとエンゲルスは、その『聖家族』で、ブルードンの『所有とは何か』のうちに、『経済学に革命をもたらし、はじめて経済に関する真の科学を可能にした』科学的進歩を見出し

たのであった。さらに彼らは、ブルードンがたんにプロレタリアのために書いただけでなく、彼自身プロレタリアであり、彼の著書は「歴史的意義」をもつ「フランス・プロレタリアートの科学的宣言」であると言明した。なおまた一八四六年五月のある匿名の論文でマルクスはブルードンを共産主義者とよんでいるし、しかも当時すなわち反駁書に着手するほぼ半年前に、ブルードンがなお彼の眼に代表的な共産主義者であったことが明らかであるような関連においてそうよんでいるのである。その間、マルクスの判断をしてかくも根本的に一変させる何かが起ったのか。なるほどブルードンの『矛盾』が出版されはした。しかもこの書物は、ブルードンの見解が根本的に変ったことを決して示すものではなかったし、また共産主義的（この言葉でブルードンは私たちが「集産主義的」という言葉で示すものを考えている）「ユートピア」にたいする彼の激しい攻撃にしても、最初——マルクスにかくも称讃された——一八四〇年の所有論で読むことのできる彼の「共同体」批判のより詳細な仕上げにすぎないのである。しかしブルードンがマルクスからの協力の要請を拒否したのは、『矛盾』より前のことであつた。事情は、マルクスが一八七〇年六月、普仏戦争勃発後エンゲルスに書き送った手紙を読むとき、われわれにもっとはっきりしてくるのである。「フランス人たちには鞭が必要なのだ。プロシヤ人が勝てば、国家権力の集中化がドイツ労働者階級の集中化に有利となる。ドイツの優越は、さらに西ヨーロッパの労働運動の重心をフランスからドイツに移すだろう。そしてドイツの労働者階

級が理論においても組織においてもフランスの労働者階級に優ることを知るには、一八六六年から今日までの両国の運動をくらべさえすればよいであろう。世界の舞台でのフランスに対するドイツの優越は、同時にプルードンの理論に対するわれわれの理論の優越を意味するであろう。……かくしてすぐれた意味で政治的態度が問題なのである。したがってエンゲルスが、その後間もなくプルードンに対する論争（『住宅問題』）でプルードンを、知識もなく助けもなしに経済学に立ち向い、「われわれが証明する処で」説教したり悲歎したりするたんなるディレッタントとして特徴つけたのは、首尾一貫したものと見るべきである。その際プルードンははっきり「空想家」という札を貼られている。プルードンが築こうとする「最上の世界」は「前進し行く産業発達の脚下に早くも甞のうちに踏みじられる」というのである。

私はこの問題を長々ととり扱ったが、それによって或る重要な事柄が最もよく明らかにされるからである。もともとマルクスやエンゲルスが「空想家」とよんだのは、その考えが工業の決定的発達、プロレタリアートおよび階級闘争に先んじており、したがってこうしたものを考慮にいれることができなかった人たちであったのだ。それが後になるとこの言葉がマルクスおよびエンゲルスから見ても、工業の発達を考慮にいれなかったとするすべての人たちにたいして無差別に浴せかけられたのである。そうよばれたなかで比較的後の時代の人びとはその理由を理解しなかったり、あるいは理解しようとしなかったり、もしくはこの双方であった。それ以

来「空想家」という貼札は、非マルクスの社会主義にたいするマルクス主義の闘いにおいて最も有力な武器となった。もはや相手の見解にたいして自己の見解の正しさをその都度立証することなど問題ではなくなった。人びとは一概に自己の立場に根本的かつ排他的に科学と真理を見出し、相手の立場には一概に空想主義と迷妄とを見出した。今日では「空想家」であることは、現代の経済的発達に立ちおくれることであり、その現代の経済的発達がいかなるものであるかは、もちろんマルクス主義が教えるのである。かの「歴史的」空想家たち、サン・シモン、フーリエおよびオウエンについてエンゲルスは、一八五〇年その『ドイツ農民戦争』で、ドイツの社会主義理論は、「そのあらゆる幻想、あらゆる空想主義にもかかわらず、あらゆる時代を通じて最も重要な頭脳をもち、いまやわれわれが科学的に立証することのできる無数の真理を天才的に予言した」ところの、これらの人々の肩に乗っかって決して忘れないであろうと声明した。ところが——そしてこれは政治的には一貫していることであるが——その正当なことが将来科学的に立証されるであろうような真理、しかも現在の「科学」——すなわち科学一般と同一視されることが稀でない科学の一傾向——は、まさしくかの「社会主義の建設者たち」の上に当時起ったように、それを誤ったものときめてしまっているような真理を予見しているところの有名無名の人たちが現在まさに生きているかも知れないということなどは、もはや全く考慮されていないのである。そうした人たちは先駆者としてのユートピストであっ

たが、そうした人たちのありうることを考慮しない人びとは、妨害者としてのユートピストである。前者は科学に道を開いたが、後者は科学への道をふさいでいる。だが全く好都合なことには、前者を片づけるには、ただユートピストという烙印をおせば十分なのである。

この方法——貼札による絶滅——の一例として、私の小さな個人的経験をあげることが許されよう。一九二八年の聖霊降臨節に、当時私が住んでいたヘッペンハイムで、社会主義的更新の信念が根拠とすべき精神的力をいかにして新たに養うかという問題についての討議^{*}が、主に宗教的社会主義者の諸サークルからの代表者の参加の下に行われたことがあった。私は、一般に無視されている、きわめて具体的な地方分散化と労働形態の問題についてとくに強調した発言でこういった。「私たちが自分の力をまだためて見ないことを空想的とよぶのは何の益もない。」この言葉は議長^{*}の批判的な注意をまねがれるわけに行かなかった。議長は私をあつさり空想家の方へ投げやりそれで片づけてしまった。

^{*}この議事録は一九二九年チューリッヒで『信仰からの社会主義』という標題で出版された。

しかし社会主義が迷いこんでしまった袋小路から脱け出るためには、何よりも「ユートピア^{*}」という合言葉をその真の意味内容について吟味しなければならない。